

## 〈書評〉

## 村井章介著 『分裂から天下統一へ』 —「琉球王国の盛衰」を中心に—

来間 泰男

## (1)

本書は、岩波書店が新書版として刊行した「シリーズ日本中世史」全4巻の最終巻であり、刊行されたのは2016年7月である。

評者は、その直前、2016年6月に、「シリーズ沖縄史を読み解く」の第5巻として、『それからの琉球王国—日本の戦国・織豊期と琉球中世後期』を脱稿したばかりであった（日本経済評論社、9月刊）ので、同書には本書の内容は反映できなかった。ただ、著者の村井章介のこれまでの文献はかなり渉猟したので、その大意は伝達できているものと考えている。

評者と著者の2つの本は、ほぼ同時代を扱っている。本書は、日本を中心に置きながら、「諸外国・諸地域との関係や海外交流に軸線を設定した」（P. i）のものであり、しかも琉球をも包含している。評者の本は、沖縄を中心に置きながら、日本の事項も多く取り扱い、しかも「諸外国・諸地域との関係や海外交流」にも手を伸ばしているという点で、対象がかなり重なっている。また、評者には、シリーズの第4巻として『琉球王国の成立—日本の中世後期と琉球中世前期』（2014年11月刊）もあり、これとも一部は重なっている。

## (2)

本書の構成は、次のとおりである。

第1章 戦国——自立する地域（1 将軍家分裂と室町外交の終焉、2 戦国大名と分国法、3 琉球王国の盛衰、4 アイヌと和人）

第2章 銀と鉄砲とキリスト教（1 後期倭寇と西国大名、2 鉄砲伝来—「ヨーロッパ」の登場、3 キリスト教と南蛮貿易、4 石見銀山からみた世界史）

第3章 天下統一から世界制覇へ（1 織田信長の「天下」構想、2 豊臣秀吉の国内「征伐」戦争、3 「唐入り」への道）

第4章 16世紀末の「大東亜戦争」（1 文禄の役開戦と三国国割構想、2 小西路線と加藤路線—日明講和交渉期、3 矮小化された征服戦争—慶長の役、4 倭城をめぐる交流と葛藤）

第5章 江戸開府と国際関係の再建（1 対明復交への執着と挫折、2 朱印船と唐人町・日本町、3 生産力の解放、人口の急増、4 「日本型華夷秩序」の創出）

これを「はじめに」と「おわりに」が包んでいる。

## (3)

第1章の「3 琉球王国の盛衰」の内部は、次のようになっている。記述の都合上、ナンバー(abcde)を打つ。「a 東アジア国際社会と琉球」「b 尚真王の時代」「c (海洋アジア)の解体」、「d 琉球中心の国際秩序」、「e 島津への従属化」。

「a」では、a-1、冊封体制への参入、a-2、三山の統一に触れた後、a-3、「琉球は、海禁政策で自国商人の国外活動を封じてしまった明によって、海外とりわけ東南アジアの産物を入手する窓口<sup>に</sup>に位置づけられた」という。そして、a-4、東南アジアだけでなく、日本や朝鮮、フィリピン群島にも「その交易ルートは…延びていた」とし、明が琉球を、主として「東南アジア」との窓口としたとしている。a-5、「明はこの物流システムを維持するために、琉球に手厚い助成措置をほどこした」。事例を挙げて、「これに応じて琉球は物流を国営事業として営んだ」。a-6、そのような「助成策の一つに、中国人(主として福建人)を送りこんで外交・貿易のノウハウを提供することがあった」。「久米村」<sup>くめむら</sup>のことである。a-7「日本(ヤマト)との関係」は、15世紀前半までつながっていたが、明との「冊封体制」とは別の原理で、「私的な親密さで覆われた」。a-8、16世紀はじめに、ポルトガル人のトメ・ピレスがマラッカにいて観察した記録があるが、それによれば、このころはかつての「(海洋アジア)の中心としての琉球」は消えていたが、その「残影」がしのばれる。「ジャンボン(日本)」のことが、「レキオ(琉球)人」の目を通して描かれている。

コメントする。a-3では、「琉球王国」そのものが、明によって成立させられたことがあいまいになっているようにみえる。それは、村井のこれまでの記述と照らせば、次のようになる。

著者村井は、「古琉球と列島地域社会」(琉球新報社編『新 琉球史—古琉球編—』琉球新報社、1991年)の中では、根拠となる事例を挙げたうえで、次のように述べていた。「こうした事態は、明が海外産物入手のための機関として、琉球という国家を自己の体制のもとに組織した、ともいえる。貿易商社(琉球王国商事)の設立だ。勤める社員は(閩人三十六姓)をはじめ多くが中国人である。海禁で行き場を失った中国商人は、琉球の国営貿易の請負に、合法的な活動の場を見出したのだ」。そして、「こうして琉球は、明という巨大な権威のカサの下で早熟的に国家的自立をとげたと。

これを承けて、評者は次のように解釈した。琉球における「国家の成立」は明によって仕立てられたものであった。その琉球には内部から「国家」を形成する動きは弱く、その「成立」は「早熟的」になされた。そのため、明は「琉球王国」に対して、さまざまな「助成策」「優遇策」を講じた。その内容から考えれば、「琉球王国」は中国・明の出先機関であったのである(拙著『琉球王国の成立』第5章第4節8、P.43-45)。

また、『海から見た戦国日本—列島史から世界史へ—』(筑摩書房・新書、1997年。のち村井『世界史のなかの戦国日本』と改題して、筑摩書房・ちくま文庫、2012年に再刊)では、「第3章 古琉球の終焉」<sup>しゅうえん</sup>を設定し、「海禁体制下の琉球」を次のように論じていた。「明は海禁によって中国人商人から海外産品を入手するルートのみずから閉ざす結果となった

ので、地の利のある琉球を窓口<sup>に</sup>に位置づけ、琉球の朝貢というあらたなルート<sup>を</sup>を確保したのである。明は、このルートを維持するために琉球に特別の優遇措置を施した」として、それを列挙し、「これを受けた琉球でも、貿易の利潤を背景に歴史のテンポが急に加速され、明の国家制度を導入するなど、国家体制や貿易組織が整備された」とする。また、いわゆる三山統一に触れ、「琉球の統一王朝は、海禁で海外活動が非合法化された中国人貿易商を国家機構のなかにとりこみ、中継貿易によって富を蓄積し、未曾有の繁栄を謳歌した。東アジアと東南アジアを結ぶ交易ルートのかなめとして、明を中心とする世界経済の重要な担い手となったのである」としていた。

その論旨と、評者のコメントは、次のとおりであった。①明が、琉球ルートを作り出した。それは、自らの海禁政策によって、海外の産物を入手する道を狭くしてしまったので、その矛盾を打開するためであった。②明は、この琉球ルートを維持するために、琉球に対して特別の優遇措置をとった。③琉球の側もこれを承けて、体制を整えていった。それまでまだなかった「国家体制」や「貿易体制」を作り始めたのである。④(略)。⑤ともあれ「琉球王朝」は、「中国人貿易商」を自らの機構の中に取り込んでいった、という。しかし、これは主体がどちらにあるのだろうか。琉球ルートを作る必要があったのは明の側であり、明自身が琉球の機構に明人を入り込ませたのではないだろうか。後には「琉球の自立」が実現していくとしても、成立当初は「明の琉球」「明のための琉球」に過ぎなかったであろう。この点、村井の議論は一貫性に欠ける。⑥この貿易体制の中で、琉球が「富を蓄積し、未曾有の繁栄を謳歌した」というのは、過大評価であろう。⑦(略)(同上書、第5章第4節13、P.61-63)。

村井はまた「古琉球をめぐる冊封関係と海域交流」(村井・三谷博編『琉球からみた世界史』山川出版社、2011年。のち村井『日本中世境界史論』岩波書店、2013年に収録)において、「冊封体制下の琉球」という項を立てて、次のように述べている。「琉球の東南アジア交易は、明から下賜された海船(もとは衛所に番号をもって登録された軍船)を使用し、磁器を中心とする明の産物を礼物として携え、その答礼として胡椒・蘇木などの東南アジア産品を受け取り、それを明に進貢することを目的に掲げていた。海禁政策によって、自国商人を通じた海外産品入手ルートをみずから閉じてしまった明は、琉球という国家に貿易公社の役割を担わせていたといえる」。ここでは、琉球は明の「貿易公社」のような存在であった、とまで言っている(同上書、第5章第4節16、P.72-73)。

村井はさらに、「分裂・動乱と民衆の成長」(宮地正人編『日本史』山川出版社・新版世界各国史1、2008年)において、琉球での三山統一と、その後の琉球を次のように位置づけている。「琉球では、沖縄本島で生まれた中山・山南・山北の3小王国が、1368年に成立した明朝と冊封関係を結んだ。1420年代に三山は中山によって統一され、他を圧する頻度で朝貢貿易を展開して、東南アジア方面の産物を中国にもたらず窓口の役割をたした。明は、倭寇対策として自国の商人の下海を禁ずる海禁政策をとっていたが、琉球の朝貢貿易は福建の中国人商人が合法的に貿易活動をおこなう場となった。那覇には彼ら

が集住するチャイナタウン（久米村）が形成された。また、明は琉球に外洋船を賜与して、その東南アジア交易を支援した。評者は、これについて次のように評した。ここで注目すべきは次の諸点である。①（略）。②中国人商人の活動は海禁政策によって閉ざされたが、「琉球の朝貢貿易は福建の中国人商人が合法的に貿易活動をおこなう場となった」とし、「琉球の朝貢貿易」が「琉球人商人」による貿易ではなく、「福建の中国人商人」による貿易だとしている。ごく自然な理解であると思われる。③その「中国人商人」による貿易活動の拠点として、久米村が形成された（同上書、第5章第4節24、P.102）。

村井には、さらに次の著作がある。「倭寇と〈日本国王〉」<sup>あらの やすのり いしい</sup>「通史」<sup>まさとし</sup>（荒野泰典・石井正敏・村井編『倭寇と〈日本国王〉』吉川弘文館・日本の対外関係4、2010年）で、「琉球の大交易時代」を次のように描いている。まず評者の要約を示す。①（略）。②「明は、倭寇対策として自国商人の下海を禁ずる海禁政策をとっていたが、琉球の朝貢貿易は福建商人が合法的に貿易活動を行う場となった。那覇には彼らの居留地（久米村）が形成された」。（中略）。③（略）。④「〈南蛮〉＝東南アジアとの関係は、明中心の冊封関係の外被に覆われているが、通交や貿易の実態に近づけば近づくほど、商業的な要素が優越していた。（中略）」。以下が評者のコメントである。ここでは、琉球王国の管理する貿易は「明中心の冊封関係」のように見えていても、実は「商業的な要素」が主な内容であることを示しているが、そうだとすれば、②の指摘と対応して、「琉球王国」そのものが「外被」（＝外皮。外側を包む皮）であって、その「内実」（本当のところ）は商業集団であり、とりわけ在沖中国人の商業集団（村井のいう「福建商人」）であったことを示唆しているであろう（同上書、第5章第4節30、P.117-118）。

a-4にも簡単にコメントする。そこでは、明が、琉球の交易活動に期待したのは、主として東南アジアとされているが、それと同じ程度の比重で日本もあったのではないか。

#### (4)

「b 尚真王の時代」では、次のことが書かれている。b-1、「15世紀も後半になると、頼みの明が財政負担の大きさから対外貿易に消極的になり、琉球への優遇もしだいに冷めていった」。「大交易時代のピークは、1469年までの第一尚氏王朝にあった」。b-2、しかし、「国内統治や版図拡大の面では、1477年から半世紀にもおよんだ尚真王の治世が、琉球王国の盛時だった」。b-3、「琉球の文化」は、中国（特に福建地方）、日本、そして東南アジアなどの文化の「異要素混合の特徴」が認められる。

b-1で、「大交易時代」のピークが15世紀半ばまでにあることを指摘している点は評価できる。評者は『それからの琉球王国』第2章、第6章第1節で論じた。「大交易時代」の終焉を積極的に論じない論者もいる現状から、このようにとらえることの意義は小さくないであろう。b-2は、尚真王の時代を、「国内統治」と「版図拡大」の面から論じている。「国内統治」については、首里城の整備・拡張、「石畳の官道網」の造営、「地方有力者層」は「首里に集住させられた」ことを挙げている。評者は、「按司の首里集住」については疑問



が出されていることを紹介し、この疑問の方に賛意を表した（同上書第4章第1節）。「版図拡大」については、「奄美群島方面への進出は15世紀なかばに始まって」いる、「逆方向の宮古・八重山は1500年前後に軍事力で併合した」（オヤケアカハチの乱を指している）が、「行政的に掌握するにはいたら」なかったとしている。

## (5)

「c〈海洋アジア〉の解体」は、「国際社会における琉球の高い地位を支えていた〈海洋アジア〉での優位は、中継貿易におけるあいつぐ競争者の出現でゆらぎ始める」として、次のように論じている。c-1、「競争者の第1は倭人勢力である」。「環シナ海地域の東北方、九州・朝鮮半島・本州方面」では、「かなりはやくからかれら〔倭人〕が琉球を締め出してしまっていた」。c-2、「第2は、…中国人密貿易商である」。c-3、「第3は、ポルトガルの進出である」。c-4、「これら琉球への対抗者たちは、対立しつつもたがいに連携をとり、東南アジアと中国・日本とを直接に結ぶルートを開発した。琉球の南海交易は後退をかさね、ついに1570年のシャム通交を最後に、琉球船が東南アジアにあらわれることはなかった」。c-5、続けて、「こうなると、琉球にとって、ヤマトとの交易の占める地位が、相対的に上昇せざるをえない。このような流れを見のがさず、地の利を生かしてヤマト・琉球間の往来に独占的地位を築きあげていったのが、薩摩の島津氏である」。

これらのことは、以前から論じられており、評者も論じた（『それからの琉球王国』第2章第3節ほか）。c-5の指摘は、一部に同様の論調が見られるが、一般的ではない。評者は、基本的に著者に同意する。ただ、そのことを薩摩・島津氏の側からのみ捉えるのではなく、琉球の側の経済力の弱さという側面もあり、島津氏への従属化はこの両面からみるべきことと考える。

## (6)

「d 琉球中心の国際秩序」は、次のように構成されている。d-1、島津氏への従属化が、「段階的に」進んだのではなく、いったんは「琉球中心の国際秩序」が形成されつつあった。d-2、16世紀半ばにポルトガル人が作成した世界図では、琉球の中に日本が含まれていた。ここに村井は「琉球の存在感の大きさ」を見ている。d-3、このころはすでに「琉球は九州方面との関係に依存する度あいが大きくなっていった」。それでも、「島津氏がただちに琉球を従属化させられなかった」のは、尚真・尚清の治世、すなわち「王朝の盛期」に当たっていたからであろう。これが理由の1つ。d-4、理由の2。島津氏内部の「複雑な合従連衡」の展開にあった。それが解消されてから、歴史は動いていく。

村井のd-1の指摘は、貴重であり、評者もこのような村井の議論を『それからの琉球王国』第4章第3節5で紹介した。d-2については、村井はくわしい分析をしていて、評者は同様に、同上書第2章第7節で紹介した。評者は併せて、当時のポルトガル人のレキオ・レキオスなど（「琉球」の音をとらえたもの）の情報について、それが本来の琉球そのもの

のを記したとは必ずしもいえないと指摘した。d-3については、評者は「尚真・尚清の治世が王朝の盛期だった」との指摘には同意できない。彼らの事績とされていることについて、疑問が提起されており、評者はそれらの提起に親近感を覚えるからである。同上書第4章第1節で検討した。d-4については、第6章第2節13のなかで、特に黒島<sup>くろしま さとし</sup>敏によって叙述した。

## (7)

「e 島津への従属化」については、次のように進められている。e-1、「琉球・薩摩の往復外交文書」の「様式」からは「同等」のように見える。e-2、「だがタテマエから実態に眼を移すと、時のくだるほど琉球の従属の色あいが濃くなってくる」。e-3、豊臣政権が成立すると、秀吉は「島津氏を介して琉球に服属の意思表示を求め」た。琉球は、「全国統一の慶賀使」を送ったが、秀吉はこれを「一方的に臣従のあかし」とみなした。e-4、「琉球はこうした要求に唯々諾々と従ったわけではないが、日本の国内統治の文脈では、琉球が島津氏の領分にくみこまれ、独立国としての意思をつらぬけなくなったことはいない」。それでも、「琉球の国家体制」に変化はなく、「明の被冊封国」という地位も「そのまま」だった。

評者が『それからの琉球王国』第6章第2節で詳論したことと重なる部分である。e-3にかかわることで、次の記述がある。「天正17年(1589)、琉球の使僧が薩摩に來航した。使僧は島津義久の案内で上洛し、聚楽第で秀吉に謁見した。ついで翌年、朝鮮の通信使が宗義智に導かれて上洛し、聚楽第で秀吉と対面した。秀吉はこれらの使節到来を、一方的に服属の意思表示と見なした。もともと琉球は薩摩に、朝鮮は対馬に従属しているというのが、かれの認識だった」(P.129)。コメントすれば、このような使節の到来を「服属の意思表示」とするのは、秀吉の「一方的」な見方としていいだろうか。当時の「日本」(まだ統一されてはいなかったが)地域では、これが「一般的」な見方であって、秀吉だけの「一方的」な見方とは言えない。ただし、秀吉の頭には、琉球も朝鮮も「日本」ではないという認識が欠けていたのである。村井はこうも述べている。「それまでの国内統一戦争の過程でそうだったように、対馬を介して働きかければ朝鮮が、薩摩を介して働きかければ琉球が、唯々諾々と自分の意向に従うものと、思いこんでいたのだ」(P.148)。このことからいべきは、次のことであろう。この「思いこみ」が、秀吉にとっては正当化されるものであるが、琉球や朝鮮にとっては「不当な干渉」「侵略」として、排除されるべきものだったのである。

## (8)

「第5章 江戸開府と国際関係の再建」では、琉球にもかかわって、次のように述べている。「関ヶ原合戦直前の1600年1月、家康は島津氏と琉球を介するかたちで、明との国交回復交渉を開始した。1609年に島津氏が決行した琉球征服に許可を与え、しかも戦後

の琉球王国の存続を許したのも、明・琉球間の冊封関係を通じて日明復交の可能性を探るためだった。しかし、薩摩への従属下に送られた琉球の進貢使はかえって明の疑惑をよび、1612年に琉球の貢期が2年1貢から10年1貢に減らされてしまう。幕府は、「福建ルート」も模索したが、成功しなかった（P.177）。

また、少し時代をさかのぼって、「九州と華南を中継する琉球の役割」に触れている。まず、「16世紀なかばの大倭寇の時代から、海禁を冒して西日本、とくに九州に渡航する中国人商人の船が急増した」こと、「やがてかれらは港町に居留地を形成して貿易活動を展開するまでになる」ことについて述べ、次いで、1541年には豊後の神宮司浦に、「大明国」の「商賈80余名が漂着して、かれらの希望により琉球経由で帰国させた（『朝鮮中宗実録』）。これはおそらく意図的な漂風でかれらは福建～琉球～九州のレートで密貿易にいそしんでいたのだろう」と述べている。さらに、「慶長元年（1596）、明渡航をもくろんで大隅半島東岸の内之浦を訪れた儒者藤原惺窩」の得た情報から、「当時内之浦の湊役人を勤めていた海商竹下宗怡は、明人との貿易を営むかたわら琉球にも妻子を置いていた（『南航日記断簡』）」ことを述べている。もう一つ、「天正9年（1581）から同18年にかけて、島津義久から根占湊小鷹丸船頭に宛てた琉球渡海朱印状が5通残されている（『旧記雑録後編』「樺山資之家記並日記」「町田氏正統系図」）」ことを述べている（P.181-183）。

## (9)

第5章のうち、「近世日本の〈4つの口〉」においても、琉球に触れ、次のように述べている。「薩摩藩の石高には琉球の分がふくまれており、その意味で琉球は幕藩制的知行体系に組みこまれていた。しかし琉球王府は、薩摩藩の監視を受けながらも、独立の国家機構を維持して国内の人民支配を実現し、中国に対しては独立国として冊封関係をもちつづけた。これは〈異国〉を従える雄藩であることを誇示したい薩摩藩と、中国との交渉に中琉関係を利用したい幕府との、思惑が一致した結果だった。それだけに、右のわくぐみを幕府が一方的に変更することは不可能であり、その結果琉球人が自己を〈日本〉の一部とする意識は育ちにくかった。幕府倒壊の過程で、琉球の一部知識人が清の側につこうとしたことは、幕藩制のもとで琉球のおかれた二重の位置づけを照らしだしている」（P.206）。

本格的なコメントは残しておくが、①「琉球王府」が「独立の国家機構を維持して国内の人民支配を実現し」ていたこと、については、その「国家機構」が地域と人民の支配をどのように支配していたかの検討が必要であろうと考えるが、②幕府・薩摩藩の支配のあり方から「琉球人が自己を〈日本〉の一部とする意識は育ちにくかった」という指摘には、好感をもって賛意を表したい。

さらに村井は、この章の末尾、すなわち本書の末尾でも、「琉球—幕藩体制下の〈異国〉」を掲げて、次のように論じている。①「16、17世紀の代わり目、アジアの大変動のなかで、…もっとも大きな変転を体験した国だった」。具体的には、②島津氏の勢威拡張、③その秀吉への屈伏、④島津氏は「以後、統一権力のうしろだてのもとに琉球に臨むようになる」

こと、⑤秀吉の朝鮮出兵のさいに「島津氏を通じて軍役を負担させられた」こと、それは「もとより琉球の望んだことではなく、琉球は…表裏の態度をとりつづけた」こと、に触れている。⑥「秀吉の死後、島津氏は琉球の併合をねらって、とりあえず家康に奄美群島征服の許可を求めた」こともあったが、⑦ついに「家康の許可をとりつけて、慶長14年(1609)に3000の兵で琉球に侵入し、尚寧王<sup>しょうねい</sup>を虜にした。この事件以降を琉球史の時代区分で〈近世琉球〉とよんでいる」。⑧琉球の「抵抗の規模は小さかった」。⑨これにより、「琉球王国の独立性は大きく損なわれ」た。また、「琉球は幕藩体制下の〈異国〉という二重の性格を付与された」(P.211-213)。評者は『それからの琉球王国』第6章第2節で論じた。

⑧の点については、3つの理由を挙げている。「(1) ヤマトへの親近感、外国という意識の薄さ、(2) ヤマトとの交易ルートを薩摩におさえられたこと、(3) 大交易時代の繁栄を謳歌したのは王家を中心とする支配層と中国系商人層にかぎられ、その陰できびしい生産条件に束縛された農村社会とのギャップは、ひろがるばかりだったこと」。(1)は、村井のほぼ一貫した観点であり、これまであまり論じられてこなかったことである。(2)は、すでに経済的には薩摩の支配に屈していたということであろう。(3)は、「大交易時代の繁栄」がこのころまで続いていたわけではないので、少し論点がずれている感がある。いずれにせよ、当時の「農村社会」が懸命に対島津戦を戦う状況になかったことは、指摘のとおりであろう。

## (10)

以上、本書の琉球関係の記述を拾って、簡単なコメントを加えてみた。日本中世史の記述については、評者にコメントの能力はないが、関係文献を評者なりに渉猟してきた感想としては、現在の研究水準の最高レベルにあると感じている。